

京の雪、能の雪

著者	ルービン ジェイ
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	会議名：日文研フォーラム，開催地：国際交流基金京都支部，会期：1996年2月13日，主催者：国際日本文化研究センター
ページ	1-26
発行年	1996-12-15
その他の言語のタイトル	Snow : real and imaginary
シリーズ	日文研フォーラム ； 82
URL	http://doi.org/10.15055/00005714

第82回 日文研フォーラム



京の雪、能の雪

Snow : Real and Imaginary



ジェイ・ルービン

Jay Rubin

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

京の雪、能の雪

Snow : Real and Imaginary

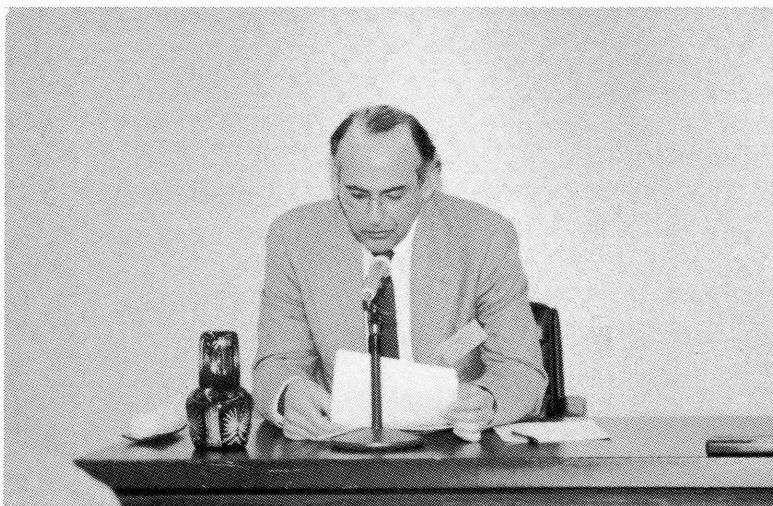
● 発表者 ●

ジェイ・ルービン

Jay Rubin

Professor, Harvard University

Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



1996年2月13日(火)

発表者紹介
ジェイ・ルービン
ハーバード大学教授

Jay Rubin
Professor, Harvard University

- 1941年 アメリカ・ワシントン D. C. 生まれ
1967年 シカゴ大学大学院博士課程（日本文学）修了
1970年 Ph. D. (シカゴ大学)
1970年 ハーバード大学助教授
1975年 ワシントン州立大学準教授
1993年 現職
1995年 国際日本文化研究センター客員教授
専門は「近代日本文学」

主な著書：

『*Sanshiro: A Novel by Natsume Soseki*』 Translated and with a critical essay (Seattle: University of Washington Press, 1977),
『*Injurious to Public Morals: Writers and the Meiji State*』 (Seattle: University of Washington Press, 1984),
『*The Miner, by Natsume Soseki*』 Translation and study of Kofu (Stanford University Press, 1988)
『*Gone Fishin': New Angles on Perennial Problems*』 (Kodansha International, 1992)

論文：

『The Art of the Flower of MumboJumbo』 Harvard Journal of Asiatic Studies, 53.2 (1993)
「セックスと歴史と記憶 - 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』」(新潮／1995) など

京の雪、能の雪 (Snow: Real and Imaginary)

一九二二年二月二日 日文研フォオラム

今日、こちらに集まっていらっしゃるほとんどの皆さんが京都の方だろうと思います。どうしてかと言いますと、わざわざよそから——よその町から、よその大都会から——「ジェイ・ルービン」という、どっちが名字で、どっちが名前か定かでない、聞いたことも見たこともない外国人（娘に言わせると、他国人）から、「京の雪、能の雪」という、変てこな題の付く話を聞きに来る人は先ず居ないからです。（言っておきますが、ジェイが名前で、名字はルービンです。生まれも育ちもアメリカの東海岸で、今年は特にそのあたりは雪の代名詞になっていますが、子供の時から雪が好きです。それなのに、四十二歳になるまでは、スキーという、雪の楽しみ方を知りませんでした。今となっては冬になりますとスキー以外のことが頭にならないほどスキーが好きです。実を言いますと、長野の白馬から帰って来たところですが、日本の雪国を精一杯、川端康成には想像も付かないほど精一杯に楽しんで来しました。）

それはともかくとして、今日、この国際交流基金京都支部にわざわざ来ておら

れる、ほとんどの皆さんが去年の十二月二十五日に京都にいらっしゃったとすれば、その日の大雪のことを覚えておられると思います。私が九月から客員として席を置いている、国際日本文化研究センターでは、特に積まりました。ここからちょっと遠い、西京区御陵大枝山町まで足を運んだことのない方はご存じないかも知れませんが、国際日本文化研究センター（略して日文研）は桂坂の上、こちらより大分高いところにあります。海拔何メートルになるかは分かりませんが、これも、沓掛山という、れっきとした名前の付く山の中腹あたりに位置しています。（そういえば、沓掛山のとっぺんには海拔四百何メートルと書いてある、大分風雪に晒された、小さな標識が木に掲げてありますので、日文研はせめて二、三百メートル位の高さにあるのではないでしょうか。）その関係で、十二月二十五日の雪はよそより深くて、よそより長く残りました。宿舎の直ぐとなりにある駐車場に積もった雪は30センチもありまして、三日間も車を動かすことが出来ませんでした。どうしても買い物をしなければならなくなったとき、日文研のスタッフの人からスコップを借りて車の周りの雪を掻いてやっと取りだすことが出来ました。いつもなら洛西ニュータウンから、長岡京へ掛けてずっと南の方へ、見晴らしの利く日文研ですが、あたり一面降り積る白い壁しか見えないようになりましたので、

世の中からかけ離れた感じが特に強かったです。普通でも不便極まる日文研ですが、この時ばかりは離れ小島と言ってもいい位になりました。勿論、雪の好きな私には、大変面白い一時でした。直ぐブーツを履いて、子供のように駆け回って、雪玉を家内へ投げかけて、楽しかったのです。多分、今年の八月の初めにアメリカに帰ったら、一年間の京都生活の一番大切な思い出の一つになるだろうと思います。

それは勿論将来のことですが、今でも、今日でも、十二月の雪のことは思い出に過ぎません。頭の中で、京桂坂の雪は今日二月十三日の雪です。十二月の雪は多分本当の雪だったと思いますが、確実な証拠を持っているかと聞かれると、何処にもありません。証人を呼んでこいと言われると、多分この部屋に有り余るほどいらっしゃるだろうと思いますが、十二月二十五日の雪のことを覚えている方は、手を挙げてください。

ああ、良かった。

じゃあ、十二月十四日の雪のことを覚えている方は？

覚えていないんですか。その日にすごい雪が降りましたのに。

少なくとも、桂坂の上では降りました。

というよりも、桂坂の私の部屋の中で降りました。

勿論、部屋の中で雪が降ったら大変ですから、それは、私の頭の中で降ったということなのです。どうしてその日に私の頭の中で雪が降ったかと言いますと、翌日の十五日に「鉢木」という能を見に行くことになっていましたので、準備として、その謡曲を読んで、「鉢木」というテキストの中の吹雪に出会ったからです。大変ポピュラーな曲ですから、ご存知だろうと思いますが「鉢木」という題は「盆栽」という意味ですが、佐野の常世という、年老いた武士がお客さまのもてなしの為に長年大事にしてきた盆栽を焚き火にして暖を取らせるというストーリーです。曲の前半は真冬の話で、長野県の八方尾根というスキー場から始まります。ワキはスキー気違いの外国人――

いや、それは別の話です。場所は長野県の何処かですけれども。

ワキは名乗って自分のことを能によく出て来る旅僧として自己紹介をしてからこんなことを言います――

われこの程は信濃の国に候ひしが

余りに雪深くなり候程に

まづこの度は鎌倉に上り、

春になり修行に出でばやと思ひ候

それから道行きになります―

信濃なる、

浅間の嶽だけに立つ煙、浅間の嶽だけに立つ煙、

遠近人おちこちびとの袖寒く、

吹くや嵐の、

大井山おおいやま捨つる

――云々、や々と上野こおすけの国の佐野の渡りに着きます。しかし、皮肉なこと

に、信濃の雪を逃げて来たのに、上野でも酷い雪降りに会ってしまいます。

あら笑止や。また雪の降り来りて候。

この所に宿を借らばやと思ひ候

宿の主人がちょっと出かけていますから、奥さんがワキに暫く外で待ってもらわなければならないのですが、そのうちにシテの常世が独り言を言い
言い戻って来ます。

ああ降ったる雪かな。

いかに世にある人の面白う候らん。

『謡曲大観』の編集者佐成謙太郎の現代語訳に依りますと、この二行は「おお、酷い雪だ。世に栄えている人は、この大雪の降るにつけても、どんなにか面白く眺めていることであろう」と書き直していますが、雪の好きなものとして、ちょっと違う読み方をしたいと思います。「ああ降ったる雪かな」という言葉はもっと懐かしい気持ちで発せられているのではないでしょうか。自分が若くて、武士として世の中に活躍していて雪が楽しめる余裕のあったころを思い起こして、雪を眺めているとしたいのです。続きの数行を読んでもそういう心持ちがこもっていると思います。

それ雪は鵝毛がもう（鷺鳥のはね）に似て飛んで散乱し、

人は鶴塹かくしょう（つるのはね）を着て立って徘徊すといへり。

されば今降る雪も、もと見し雪にかはらねども、

われは鶴塹しょうを着て立って徘徊すべき袂も朽ちて袖せばき。

ほそぬいしも みちのく
細布衣 陸奥の

けふの寒さを如何にせん。

あら面白からずの雪の日やな。

凌ぎにくい冬ではあるかも知れませんが、見る分には、大変美しいです。

どれだけ降っているかは常世にや々と会えたワキの言葉を聞いても分かります――

未だ日は高く候へども、

余りの大雪にて前後を忘れて候程に

一夜のお宿を御貸し候へ。

佐成の訳注によると、「前後を忘れて」は「どうすればよいか、処置に苦しむ」という意味ですが、もうちょっと文字通りに読みますと、前と後ろまで忘れるほど降っているとなります。とにかく、雪が沢山降っています。

それにもかかわらず、シテは、能ではほとんど決まっているように、自分の家が余りにもうらぶれているので、ワキを上がらせないで、次の町に行くように言います。「あつまらない。頼み甲斐のない人を待っていたものだ」とぶつぶつ言いがら、ワキは雪に姿を消します。

お坊さんを追い出したのが大間違いだつたと妻から諭されて、常世は追いかけるつもりで家を出ます。旅僧の後ろ姿が見えた時、常世は――

「なうなう旅人お宿参らせうなう」と呼びかけます。

しかし、ワキには聞こえないらしい――

余りの大雪に申す事も聞こえぬげに候。

痛はしの御有様やな。

もと降る雪に道を忘れ。

今降る雪に行き方を失ひ一所に佇みて。

袖なる雪をうち払ひうち払ひし給ふ景色。

古歌の心に似たるぞや。

「駒とめて、袖うち払ふかげもなし、佐野のわたりの雪の夕暮。」

これで、能の中の雪のイメージが新古今集の中の雪のイメージと重なって一段と詩的に美しくなっています。雪があんまり好きでなくても、こういう、降る雪でいっぱい謡曲を読むと、頭の中で雪が降らないと、却ておかしい位じゃないでしょうか。外国語の日本語で、それも中世の日本語で読むと、大分暇がかかりますので、私の場合、日本の読者と違って頭の中の雪が非常に長い間降りやまないのです、そのイメージの効果が幾らか拡大されてしまうのかも知れませんが、でも、とにかく鮮やかなイメージが脳裏に焼きつけられて、忘れられない思い出になってしまっています。今になって、十四日に降った謡曲の雪の思い出も二十五日に降った桂坂の雪の思い出も頭脳の中でほぼおなじ次元の所に宿って、ほぼ同じぐらいの現実性を持っているようです。どちらかと言えば、十四日の読んだ

雪の方が幾らか鮮やかで、リアルじゃないかとも思います。

結論は二つ考えられます―

一つは、ジェイ・ルービンというアメリカ人は気が狂ってしまったので、成るべく早く入院させた方がいいということです。もう一つは、謡曲というものは大変詩的な力を持っていて、人の意識の中に鮮やかなイメージを作ることが出来るということです。それで、最初の結論が正しいということになりますと、ここは皆さんに直ぐ帰っていただいた方がいいということになります。二つ目の結論が正しければ、謡曲は文学だという意味になってしまいます。謡曲が文学だと言えば家に閉じこもって、和歌や小説みたいに読んでそれで全部が分かると、言っているのでは決してありませんけれども、せめて、謡曲には文学的な要素が十分あるという位の事が言えるでしょう。こういう説を唱えるのは私一人ではありません。謡曲を文学として読む学者はそれほど多く居ませんけれども、居ることは居ます。たとえば、平川祐弘という、当時は東京大学の先生だった方が一九七五年に『謡曲の詩と西洋の詩』という本を書いて、こういうことを言っています―

夏目漱石の「行人」に「景清」の謡を聞く場面がある。作中の「自分」はここでは漱石の気持ち語っているものとおもわれるが、

自分のかねてから此の「景清」といふ謡に興味をもつてゐた。何だか勇ましいやうな惨ましいやうな一種の気分が、盲目の景清の強い言葉遣から、又遙々父を尋ねに日向迄下だる娘の態度から、涙に化して自分の眼を輝かせた場合が、一、二度あった。

漱石は謡や舞の芸術としての「景清」だけでなく、文学としての「景清」、詩としての「景清」にも強く惹かれていた。そのような漱石の関心の持ち方が、世間一般の謡の愛好者たちの関心の持ち方とややずれたものであったことは、作中の次のようなエピソードからも察せられる。そのお客たちの謡が滞りなくすんだとき、

兄が、急に赭顔の客に向かって、「さすがに我も平家なり物語申してとか、始めてとかいふ句がありました、あのさすがに我も平家なりといふ言葉が大変面白う御座ゐました」と云った。……けれども不幸にして彼の批評は謡の上手下手でなくって、文章の巧拙に属する話だから、相手には殆んど手応がなかった。

西洋でモーツァルト、ワーグナー、ヴェルディなどのファンがオペラへ興味を寄せる時もほぼ同じことだが、人々は歌手の歌い方や演技の上手下手、

オーケストラの出来映えなどは話題にのせるが、リブレットの詩的な価値、その文章の巧拙を話題にのせることはいたって少ない。そしてリブレットの文章の意味内容をよく心得ずに外国語でオペラを歌う歌手が多くいるように、謡本の文学的価値や詩的価値を眼中に入れずに謡をうたっている人の数もまたすこぶる多いのである。それだから、漱石の「行人」の作中人物が「さすがに我も平家なりといふ言葉が大変面白う御座りました」という能楽脚本に對する文芸批評を下だした時に、……謡をうたった側の人は、きょとんとしたのであった。(7—8頁。朝日選書。)

私の場合、能というものが存在するという事実を始めて知らされたのは大学二年の時、日本文学史入門とかいう授業を受けた時でした。もう三十五年も前になります。どうしてそういう授業を取ったかといえますと、翌年から英文学を専攻しようと思っていましたので、その前に、何か、西洋と違った、東洋文化に触れたいと思い、何でも良いから、一科目を受けようと思っていたからです。たまたま、日本文学入門がその学期にありましたので、謂わば、軽い気持ちで受けることにしました。テキストは、勿論みんな英訳でした。日本語のにの字も知らない人ばかりがその授業を受けていましたので、先生は英語で読ませるより仕方があ

りませんでした。ですから、私が始めて読んだ謡曲は英語で読みました。ということは文学として読んだということです。実は、割りとつまらない文学として読んだのです。プロットもほとんどありませんでしたし、人物も影の薄いものばかりで、現実性を全く欠いていましたので、何処が良いのかさっぱり分かりませんでした。それでも、分からないままに、なんとなく、気に入りました。「源氏物語」や「伊勢物語」ほどは、好きでもありませんでしたが、何時か、多分、日本語で読めるようになると、読んでみる価値があるかも知れないと思ったほどには、印象が残りました。どうしてまた、その、「日本語で読めるようになる」という考えがあったかと言いますと、先生はテキストに英訳を使っている、授業の時、日本語の原文を引き合いにして、色々説明してくださいましたので、謡曲でなくとも、日本文学を原文で読んでみたいという好奇心が沸いて来たからです。それで、学年が終わると、日本語の教科書を買って、一人で勉強し始めました。それが日本文学にはまり込んでしまうきっかけになったのです。

日本語の本がまがりなりにも読めるようになったのは、その三四年後の大学院生時代でしたが、その頃から謡曲の良さがもう少し分かるように成り始めました。衝突やら対立を中心とする西洋劇と違って、人間一般の心にある、一つの希

望又は一つの恐怖を鮮やかなイメージに託して表わすポエムだと思うようになりました。それでも、私にとって能はあくまで文学でした。その頃は生徒達に能の生きた舞台を見せたり、謡の音楽を聞かせたりする手段として、カラービデオどころか白黒のフィルムさえアメリカの大学にはありませんでしたから、あるいは無理もない話だったのかも知れません。

漸く日本に初めて来て、能楽堂に頻繁に通うようになったのは、昭和四十年の秋からでした。専門は明治文学でしたが、暇の時、謡曲を読んで、謡の稽古も少しして、能の本舞台を楽しめるようになりました。最初は楽しむというよりは、びっくりしたと言ったほうが正しいでしょう。特に、始めて大鼓の掛け声なんか聞いたときは、ぎょっとするほど不気味でした。なるほど、幽霊が出る演劇に相應しい音楽だなあとも思いました。何十回も演能を見た今でもそう思わないでは居られない時もあります、それはどうでもいいことです。今日、ここで言いたいのは、能を始めて英訳文学として知って、大学院で日本文学として読ませられた私が能を見に行くと、どうしても能を文学として見ないではいられないということです。そして、そういう風に見るのは全然間違っていないと思います。どちらかというと、能を文学として見ないほうが間違っていると思っているほどです。

例えば、話を「鉢木」に戻して見ましょう。読むとき雪があんなに激しく降っていたのに京都観世会館に行くと雪が一片も降っていないじゃありませんか。歌舞伎なら、天井裏からおびただし位の紙の雪をばらまくに違いなければ、上品で、貴族的な能ではそんな陳腐なことは絶対にしません。といって、一種の妥協として、前場の中ごろあたり、後見が所謂「雪綿をつけたる鉢の木の作物を正面先に出」します。でも、その時点では、場面はもうすでに屋外から屋内に移って、主人公の常世が普段自分の盆栽を中に置いているか外に置いているか分からなくなるような逆効果があるかも知れません。とにかく、途中で正面先に置いたひよろひよろとした作り物で、信濃の山奥の雪や、上野で道が分からなくなるほどすごい吹雪を暗示することが出来ないでしょう。役者達も、雪の事をぶつぶつ言いながら、厚いコートを着てもいけないし、肩に積もった雪を示すために綿も付けていけないし、寒いからとぶるぶるふるえないし、手も擦りません。謡う時も声色を普通の能の謡い方と全く変えません。風の吹く音響効果もないし、空が雲で暗くなっていることを示す照明効果ありません。雪と寒さを感じ取らないと、常世の零落の程度が分かりませんが、常世の零落が分からないと、曲の焦点になる、彼の武士としての真心が通じないでしょう。じゃあ、どうして聴衆の人々に

雪が降ってると分かるでしょうか。結局、謡曲の言葉でしか方法はありません。と言いますと、桂坂で読んでいても、観世会館で聞いていても、「鉢木」に出て来る人物の環境やら、状況やらを理解するのには、作者がもともと書いた言葉を文学として経験しなければ能にならないということです。それは謡曲を読む人にとっては非常に都合のいい話です。わざわざ能楽堂へ出かけて行かなくても能の中心が大分染しめるからです。その意味で能は西洋のドラマ以上に読んで楽しんで染めるものです。しかし、逆に言えば、日本の能楽ほど、劇場の中でも文学として鑑賞しなければならぬ芝居はあるのではないのでしょうか。

「鉢木」の後場を見ても同じことが言えると思います。後場になると、盆栽を焼いてまでもてなしたお客さんが実は普通の旅僧じゃなくて、一二二七年から一二六三年まで実在した鎌倉執権北条時頼こと最明寺時頼が「旅僧に身をやつして諸国を巡歴して、不正を正し、仁慈を施そうとする主君」だったということが分かります。常世の忠義を試すつもりで、時頼は「諸国の軍勢を呼び集めて、」常世が雪の晩言った通りに、「鎌倉に御事変があったならば……誰よりも先に鎌倉に」駆けて来るかどうか見たかったです。その日に「関東八ヶ国の大名小名が、思い思いに粧いを凝らして鎌倉入りをする様は」――

さぞ見事にて候らん。

白金物打つたる糸毛いとげの具足に。

金銀をのべたる太刀刀たちかたな。

飼こひに飼うたる馬に乗り。

乗替のりがちゅうげん中間きらびやかに。

などなど、じつにおびただしい数の武士が色さまざまの鎧を付けて、時頼の前

に集まっている中に不格好な老武者常世が呼び出される――

上り集まる兵つわもの。

きら星の如く並み居たり。

さて御前ごぜんには諸侍。

その外数人ほかすじん並み居つつ。

目を引き指をさし笑ひあへるその中に

横縫よこぬいの、ちぎれたる

古腹巻さびなぎなたきに鎗長刀。

やうやうに横たへ。

わるびれたる気色もなく。

参りて御前に畏る。

能舞台には勿論馬を出さないし、大勢の武士を示す意味でワキ最明寺時頼のそばに金糸きんし織りの美しい着物を着て刀を持った二人のワキツレを置くに過ぎません。常世の鎧がちぎれていると言われますが、実際に役者が着ている物を見ると、金糸こそは織り込まれていないにしろ立派な能衣装になっています。千切れているところなど少しもありません。言葉の分からない人が舞台だけ見ていると常世が酷い貧乏だとはとても考えません。くどいようですが、「鉢木」を舞台で見ても文学として理解しないと能としても理解できないと思います。

ご承知のように、能には五種類の曲があります。つまり、神能、武士の幽霊が出る修羅もの、平安文学と関連のある幽霊が出がちな三番目もの、生きた人間が主に出る四番目ものと、最後に鬼がよく出て来る五番目もの。「鉢木」は現実的な要素の多い四番目ものの中でも特に現実性のある、西洋のドラマに近いものと言えますが、それでも、西洋の芝居と比べても、日本の歌舞伎と比べても、リアリズムからは大分遠いものです。それは何も馬とか軍勢とか雪の降り方とかいうものに限らずに、舞台装置の問題よりも遥かに根本的な次元についても言えることです。結論から先に言いますと、能は舞台劇よりも、舞台をたまたま利用する、

音楽的な構成を持った語りものの一種です。

ちらっと見ると、能は世界のどの国の芝居と同じように俳優を舞台上がらせて、脚本に書いてある人物になったかのような振舞いをさせているようですが、本当はずいぶん違います。例えば、先引用した雪の場面をもう一度見てみましょう。旅僧を家から追い出したのが間違いだと気がついて常世は追いかけて行って、大雪の中に立っているワキの後ろ姿を見て、こんなことを言います――

今降る雪に行き方を失ひ（がた）一所（ひとところ）に佇みて。

袖なる雪をうち払ひうち払ひし給ふ景色。

古歌の心に似たるぞや。

「駒とめて、袖うち払ふかげもなし、佐野のわたりの雪の夕暮。」

続いて、こんなことを言います――

かやうに詠みしは大和路や。

それからシテは謡いだす――

三輪が崎なる佐野のわたり

そこでシテは舞台の右側に座っている地謡に言葉を譲ります。役者がちゃんと舞台の真ん中に立っているのに、急に黙ってしまつて、歌の続きを、芝居の人物

でも何でも無い、そこにいても居ない振りをしている八人の男に謡って貰う――

これは東路^{あづまじ}の。

佐野のわたりの雪の暮れに迷ひ疲れ給はんより。

見苦しく候へど一夜^{ひとよ}は泊り給へや。

佐成謙太郎の現代語訳を見ると、こうなっています――「尤もあの歌を詠まれたのは、大和の国三輪崎の佐野のあたりであり、これは関東の佐野であるが……（といいながら時頼に追い付き）このひどい雪の夕暮れに道を迷ってお疲れになるよりは、まだましでございましょう。ほんとに見苦しい所ですが、私の所で一晚お泊まりください。」

結局、地謡は常世に急になってしまったようなことを言うばかりでなく、常世の声で、ワキの時頼に話し掛けるのです。一見、芝居として不条理としか言えないこの手段は能の音楽的構造から見れば不思議でも何でもないものです。序破急の原理に立つ能では、破の二段の終わりに当たるこの節では、地謡がシテに代わって謡わなければ能としてはおかしい位形が決まっています。しかし、それより面白い例があります。

後場で常世が軍勢の集まっている広間に入ろうとすると、こんな独り言をする――

「いいでい御前に参らん」

「つまり、「さあ、お前に参ろう。」けれども、能役者が口にする言葉はそこで終わらない。実はこうなっています――

「いいでい御前に参らんと大床おほゆかさして見渡せば」

「大床」というのは、広間という意味ですが、この言葉は能役者の口から出て来ても、常世という人物の口からは出てこない。つまり、能役者は一音の格助詞である「と」を発音した瞬間から、常世という人物でなくなつて、語り手になつてしまつたのです。「いいでい御前に参らんと大床おほゆかさして見渡せば」云々。

演劇の人物が自分の動作を三人称で描写する手法は西洋劇から見ても、呆れたものです。例えば、シェークスピアを見ても分かります。ハムレットはオフェリアに対して「尼寺へ行け」と言うに違ひないですが、絶対に「尼寺へ行けと言つた」とは言いません。オセロが愛妻のデスデモーナを絞め殺さないと「オセロ」と言う悲劇は成り立たないけれどもオセロになつた俳優の唇からは「デスデモーナを絞め殺す」と言う言葉が聞こえて来ません。

関ヶ原の戦いの頃活躍していたシェークスピアも現代から見るとそんなに写実派の劇作家でもなくて、自分の書いたセリフに有り余るほどの詩的なレトリック

を付けていましたけれども、まるで鉄則が存在していたかのように、絶対にそのセリフの中に、ある人物が自分の動作を語る言葉を入れませんでした。そんなことをすれば、俳優がその人物になりきってしまった、折角のイリュージョンが吹っ飛んでしまうのではないでしょうか。しかし、もともとそういうイリュージョンを作ろうとしない能では、全然かまいません。むしろ、当たり前のことではかりません。それから、シテが「大床さして見渡せば」という言葉を謡ってから、先みたいに黙ってしまって、また地謡に続きを謡ってもらいます。今度は、しかし、地謡は先のように常世のことを一人称で謡わないで、能役者が始めた三人称の語り続けるのです。合わせて、こうなります――

いいで御前に参らんと

大床おほゆかさして見渡せば

今度の早打ちに。

今度の早打ちに。

上り集まる兵つわもの

きら星はしの如く並み居たり。

さて御前ごぜんには諸侍。云々

結局、能役者と地謡の役割はほとんど変わりません。両方とも謡曲の言葉を語するためのチームに属しているのです。役者は勿論、舞も舞って観客の目を開く、所謂「開眼^{かいげん}」の役割をも果たしていますが、耳を開く「開聞^{かいもん}」の機能のおおよそ八十パーセント以上は謡曲の言葉が文学として果たしているのではないかと思います。

いや、これは言い過ぎなのかも知れません。能の音楽を無視しているからです。ここでは、日本の能楽と西洋のオペラを比較した、平川教授の言葉を思い出さなければなりません。「リブレットの文章の意味内容をよく心得ずに外国語でオペラを歌う歌手が多くいるように、謡本の文学的価値や詩的価値を眼中に入れずに謡をうたっている人の数もまたすこぶる多いのである。」こういう似たところがありますから、能役者と演劇俳優よりも能役者とオペラの歌手を比較した方がよかったのかも知れません。能が演劇よりもオペラと比べるべきものだととしても、以上、能役者の役割と演劇俳優の役割の違いについて申し上げたことには変わりはないと思います。オペラの歌手は絶対に自分のことを三人称で語ったり歌ったりすることはないし、舞台の大勢が歌っている場合でも、劇の中心人物の代弁者として一人称で歌うこともあります。

我々聴衆として演劇俳優から要求するのは、何よりも脚本のテキストの意味と知的に取り組むことです。シェークスピアのような古典ものの場合でも、口から出る言葉を今の瞬間考え付いたかのように俳優から述べてもらいたいのです。俳優の新鮮な解釈が古い言葉に新しい意味を与えてもらいたいのです。しかしオペラの場合でも能の場合でもそういうことはありません。オペラの歌手にはメロディをなるべく正しく、なるべく美しく歌ってもらいたいのです。言葉の意味が分からなくても、レオンティン・プライスの声またはルチアーノ・パバロッチイの声を聞いて涙を流した人の数は少なくないでしょう。却て分からない方がいいと言う人も居る程です。どうしてかという、言葉の内容が恥ずかしい位ばかばかしい場合が多いからです。

能の言葉にもプロットの展開にもばかばかしいところが全くない訳でもありませんが、言葉が風景や人物の行為を描写しますので、オペラの言葉よりも、ほとんど重要な役割を果たします。ですから、役者と地謡の言葉をなるべくはっきりと理解するのが大事です。

オペラの歌手にも、能の役者にもメロディをなるべく正しく、なるべく美しく歌ってもらいたいのですが、特に能役者の場合は、五百年以上も伝承されて来た

スタイルで話したり、謡ったりしてもらいたいです。そのスタイルは日本の中世の美意識に——つまり、仏教的な美意識に基づいて出来上がったものです。そういう美意識はこの世の現実性を否定して、むしろ五感では認識しえないものの現実性を高く評価したのです。例えば目や耳で感じ取ることの出来ない、他界の幽霊か、それともそんな超自然主義的なものでなくても、普通の日常生活では経験できない美しさや男らしさや親心や自然界の凄さや幸福や平和や愛を。

能における現実には理想化された現実で、人間の頭の中でしかつかまえられる現実です。役者が舞台ですることとは、舞台上で展開している動作や事件がすべてリアルでないということを初めから終わりまで我々に知らせ続けます。本当の人間はどうしても能役者のようには話さないのです。室町時代にも今もそうでしょう。現代の日本語を能のスタイルで話すと滑稽なばかりです。西洋の俳優のありようは、「僕は本当の人間ですよ。あなたがいつもしゃべっているように僕はここに立つてしゃべっているんですよ」と暗に聴衆に呼び続けるのにたいして、能役者のありようは「僕は本当の人間じゃないですよ。僕が今言った舞姫や涼しい森はここにはないですよ」と、耳を開いて聞いている我々に呼び続けるのです。

先月日文研で梅若猶彦さんの研究発表を聞きましたが、梅若さんは、能の演技

には強調というものは絶対禁物だと言いました。私は彼の言おうとしていたことが分かるような気がします。つまり役者が動作や声に強調を加えますと、一種の本来らしさがついてくることになると思います。しかし、能でいけないのはその本来らしさ——謂わば日常性なのです。日常性を極力抑さえた音声とか面を被った顔とか面を被っていない時の表情を抹殺した、所謂「直面」^{ひためん}はすべて舞台の現実性を否定します。その代わりに、我々の想像するイメージの現実性を肯定するのです。ということは、能は大いに文学の力に頼るということです。ですから、私は十二月の京都で、記憶に残る、二つの大雪を経験することが出来ました。

以上

発表を終えて

「善界」（ぜがい）という能においては、善界坊（ぜがいばう）という天狗が遠い中国から飛んできて、日文研の北の方にある愛宕山の頂上に着陸して、日本の全国民を慢心の輩に作り替えようとしますが、京都の向こう側に聳え立つ比叡山の日枝神社から山王権現が東の風に乗って飛んできて、わけなく善界坊を空から叩き下して、やっつけます。とにかく、能を京都で研究すれば、色々な曲と関係のある地名が至るところにありますので、良い刺激になります。今まで読んだところ、桂坂は能には出て来ないようですが、桂坂で経験した、二種類の雪のおかげで、能の良さがもう少し分かってきたと思います。

A handwritten signature in black ink, consisting of stylized, flowing characters that appear to be 'Jin' or similar.

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがいがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 曩七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊びー拳を中心にー」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像ー現実と幻想ー」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性ー恵信尼の書簡ー」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑮	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑯	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑰	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
⑱	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
⑳	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉑	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉒	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールバルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウィーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) J ürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロップ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤①	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
⑤②	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・来訪研究員) KIM Choon Mie 「近代日本知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 －科举制度をめぐって－」
⑤⑤	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り－平安朝文学の特質－」
⑤⑥	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・国際日本文化研究センター客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤⑦	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤⑧	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・ カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウオ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIW0 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」

67	6. 9. 13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACE 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6. 11. 15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6. 12. 20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1. 10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2. 14 (1995)	嚴 紹 盪 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3. 14 (1995)	王 家 驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4. 11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦4	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Liudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7. 25 (1995)	崔 吉 城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦7	7. 9. 26 (1995)	蘇 徳 昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
78	7.10.17 (1995)	李 均 洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「－日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
80	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリユーシナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1. 16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

82	8. 2. 13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3. 12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
84	8. 4. 16 (1996)	モーリス・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
85	8. 5. 28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学・日文研客員助教授) Mark Cody POULTIN 「能における『草木成仏』の意味」
86	8. 6. 11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7. 30 (1996)	シルヴァン・ギニール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9. 10 (1996)	ハーバード E・プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
89	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国 東北民族学院助教授・日文研客員教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰」

発行日 1996年 12月15日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

1996 国際日本文化研究センター

■ 日時

1996年2月13日(火)

午後2時 ～ 4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

